

第二十四章 ゲ・ペ・ウの監獄

囚人生活の一斑

一九一七年の十一月革命の最初の數週間は囚人達も、自由にスモルニの地下室から外出することが出来たものであるが、今はかうしたゆとりのある無秩序さと、全くロマンチックな柔かさの漲つてゐた時代とも違ふし、例の『自動的な』ラテー時代とも違つて、ゲ・ペ・ウは十ヶ年の研究の後に『地球上の最も自由な國家』の土の上に確かに世界中で優秀なものたらしめてゐる一、二の監獄を設置することに成功したのである。

一般に監獄は密な網となつてロシアを覆うて居り、その内部規則や囚人の待遇は整備され、精密科學の水準に上つてゐる。最も不思議なことは、表向きはロシアには監獄がないと云ふことである。

憲法の條文によつても、ソヴェート社會主義共和國聯邦は此等監獄をツァー時代の風習の遺物として排撃し、いかなる種類の犯罪もこれを疾病として取扱ふと稱してゐる。疾病である以上、それは治り得るか、それとも治らないか何れかである。

そこでこれら病人を前者に對しては『矯正院』に後者に對しては『隔離所』にそれぞれ分けることが問題となつてくる。ところが建物が一般に不足してゐるので、帝制ロシア時代の舊い監獄を利用せざるを得なく

なつた。茲においてか舊い名稱の代りに『自由剝奪のソヴェートの家』といふ新しい看板によつて置き代へられたのである。

ところが不幸にして所謂病人の數が絶えず増大して行つたので、どうしても新しい健康の家建設が必要になつて來た。

此等新しい種類の健康の家のうちで最も有名且つ推賞すべきものは、モスコにあるゲ・ペ・ウの『國家監獄』である。この監獄は昔の『ロシア』保險會社の中庭にある假屋内に設置されたもので、模範的な監獄となつた。それは四方五階建の建物によつて取圍まれて居り、そこにはゲ・ペ・ウの各部が設置されてゐる。かくしてモスコのまゝ眞中に理想的な隔離所が出現したわけである。

そこではチエツカ時代に命令と不氣味な沈黙とが絶えず往きかへりしてゐたのである。監獄からは何の音も外部に洩れず、また外部からも何の音も監獄の厚い壁を透つて行かなかつた。

『秘密監獄』の規則の第一條は囚人の絶對的な法律上の權利停止を定義してゐる。囚人は收監されるや否や、一切の人格を喪失し、單にチエキスト的治療法の經驗の對象となるにすぎない。あらゆる抗議は、それが誰に向けたものでも、容赦なく當局のために阻止されるのである。囚人はどんな要求も、どんな哀訴も、どんな希望も全然顧みられない。なぜなら、秘密警察の最高原則は『階級の敵たる囚人は人間ではなく、品物である』といふ風に定義されてゐるからである。

秘密監獄は單に上流階級の人々、宗教家、陰謀家及び知名な反共産主義者のみを收容する。その制度には多分に形式主義が刻みつけられてゐる。例へば、是非『あなた』といふ言葉を使はねばならない。そして被拘禁者は當局の決定を経ずしてみだりに笞刑を受けるやうなことはない。

ところがその當局者は偶然にも兇暴性によつてその名が高いチエキスト・ドゥキスであつた。廊下にあつては、囚人は話す権利も、咳をする権利も、くさめする権利さへ持つてゐない。看守もまた少しも音を立てないやうに注意する義務があるのだ。即ち、死の沈黙が嚴守されねばならない。

尙ほ囚人達は週に二回地下室に連れて行かれるのであるが、そこは以前の死刑執行場で現在はロシア風呂が据附けられてゐる。靜肅を破らないために、個々の死刑執行は正面にあるルービヤンカ十一番地の家で、大衆的な死刑執行はチョンの兵營に於て行はれる。

囚人達は昔のホテルの部屋に入れられてゐる。監房、廊下、建物は掃除が行届いてゐるのでピカ／＼する位である。廣間は日に三回掃き清められ、週に二回拭き清められる。入口と廊下とは監視されて居る。尙ほ廊下には人が澤山居るが、コトリともせず全く死の沈黙である。どの監房にも板の床、マット、茶瓶、ブリキの湯呑が備へ附けてある。衣服も下着類も給與されない。もし囚人が下着類を必要とする時は、死刑に處せられた者の下着類を給與されるのだが、大抵の者はそれを辭退する。

尙ほ監獄の規則は各監房に貼り出されてゐるから、囚人は監房に這入るや否やどうせねばならないかを正確に知るわけである。一人ごとを云つたり、書いたり、針や、糸や、本を所持したり、他の囚人に話しかけたりすることは禁じられてゐる。

週に一度看守は一言も云はずに監房内に二冊の本を置いてくれる。この書籍の配布は全く機械的であつた。それらの書籍は革命前のもので、舊い圖書館からの寄せ集めものだから、或る日にはプラトンの本が手に這入るかと思ふと、次の番には支那文典とか、聖書とか、或はマルクスの著書が手に這入つたりするのである。

囚人のグループ別

囚人は四つのグループ、即ち、刑事犯人、政治犯人、『特別犯人』及び例外の囚人、これである。數において最も優勢なグループは刑事犯人のそれであるが、それは一般に信じられてゐる如くに、聊かも普通法の刑事犯に關係してゐるのではない。此等『普通法』に犯人たる窃盜や強盜は秘密監獄には這入らないのだ。

かう云う意味の『刑事犯人』は謂ゆる社會主義者でない政治犯人、百に對して九十の割合である。彼等は外部から食物が差し入れられないといふ見地から總てのうちで最も蔑視されてゐる。彼等は病氣に罹つてもよく養生することが出来ない。その病氣が結核病であらうとも、或は壞血病であらうとも、一度決定されたメニューはいかなる口實の下にも變更されない。

次に種々の社会主義黨員らは囚人中の第二のグループに属する。總ての社会主義者は彼が社会主義者たる唯一の事實だけで、このグループ中に入れることはできない。例へば彼が外國に與へる利害關係の如きはその重要理由なのである。このグループの大きい特權の一つは肉又は魚を一日分の食糧の御菜として與へられることである。

『特別犯人』とは、逮捕する必要ありと判断された悪いことをした宗教家、共産主義の反對者である。その数は餘り多くない。彼等も色々と優遇されてゐる。彼等は單に雑誌を讀むことを許されてゐるのみではなく、彼等の判事と一緒にマルクス主義の問題について毎日討論することも許されるのである。かうした討論においては、豫審判事は眞實の學者と理論の守護者といふ役割を演ずる。彼等に對する手當は、普通の囚人と同じく『特殊なもの』である。彼等は自由の身である共産主義者が口に入れることができない位よいものを食べてゐる。

最後のそして最も高級なグループは、最後には犠牲に供せられるといふ意味で、充分食物が與へられ、肉體的にも、道義的にも優遇される囚人なのである。彼等は今後の裁判における偽證人であり、犯さなかつた犯罪を思想の祭壇で告白させられて犠牲に供せられる人々であるか、重大にして危険な使命遂行のために選ばれた人々かである。

従つて彼等は監獄内では最大限度の自由を享有してゐる。彼等は自分の仕事を續けたり、家族のものと接

することも出来る。彼等は酒を飲んだり、晝には五皿、夕方には三皿の料理を食べる權利を有してゐる。

彼等は時折一つ乃至二つの自由に署名する以外何等要求されることなく、次いで『彼等の』事件の公判が到來するときには、彼等の共同被告の責任を負つて彼等の行動に遺憾の意を表しさへすればよいのである。

舊い東洋の習慣に従つて、もし彼等にして銃殺されるために十一番地の地下室に送られない限り、裁判の終りには、彼等は充分に賠償される。

囚人の懲戒拷問

囚人が規定の命令に従はないといふことが起ることは勿論である。即ちいつも意地張り者があるので、それがため懲戒が必要となつてくる。

この懲戒は過失の重要性と囚人のグループ別によつて違つてゐる。簡単な懲罰には外部より食物の差入れ、面會、讀書等の禁止がある。より重い刑罰の一つには、便所使用の禁止がある。かゝる懲罰を發明した人は實際にはユーモアに豊かであつた人なのだ。なぜなら、そうしたことに辛抱することは容易なことではないからである。

次にあらゆる種類の囚人に適用されるのではないが、土牢入り、笞刑、拷問の如き舊い傳統的な方法も或る囚人に用ひられる。土牢入りの刑罰には三種類ある。簡単な土牢は壁で塞がれた監房であり、囚人は上

著を脱がされ光も寢床も禁止され、眞暗い部屋の土の上につちやられるのである。もしそれでも懲りなければ、今度は乾燥爐又は氷室に移される。この乾燥爐に入れられた囚人は、乾燥し、焼けてゐる空氣の中で窒息せんばかりになる。氷室は地下室にあるのだが、その上は足の高さまで凍つた水が溢れて居り、しかも寢床がないのだ。この刑罰を受ける囚人は時には數週間もこんなひどい目に遇うのである。

しかも尙ほ彼が頑張り続け、且つ補足的に笞刑を加へられても、自己の過失を認めないと、ゲ・ペウは最も恐るべき拷問に訴へることを躊躇しない。しかしこの拷問は極く稀にしか行はれず、且つ拷問を加へた後にはその囚人は必ず銃殺されるのである。

勿論現在には中世紀時代に使はれた舊い色々な方法を借用してゐる時代ではない。指を壓し潰したり、舌を引き抜いたりするやうなことはやらない。秘密警察はモダンであり、その技術は完備して居り、豊富な經驗によつて出来るだけ血腥い方法を採用してゐない。

秘密監獄は典型的な監獄であつて、地方の監獄もそれに教へられてゐる。同監獄もまたチエキスト大學の生徒にとつては實習監獄である。ゲ・ペウの生徒は看守の職務を充分知らねばならない。彼が學校で受けた理論的教育を秘密監獄で實踐に移すのである。

この實習は六週間繼續し、見習生はその實習中に監獄の内部職務の詳細について教へを受けるのである。實習を終つて、更にもう一度卒業試験を受け、卒業すると、地方に派遣される。幸にも何處かの國が顛覆す

れば、その地における監獄の組織につき實見し、自分の職業の通となるのである。

數種類もある監獄のうちで、最も下級で最も評判が悪く、略して『アンフェルノ』と呼ばれてゐるのは、チエキストの慣用語では『敵分子又は階級外の人々のための隔離所』といふ名稱が附せられてゐる。そこには『監獄通信員』によつて組織されてゐる一つの珍奇な新機關がある。此等通信員は今日でもなほ出てゐるチエキストの雑誌に囚人の生活條件やその精神状態に關して報告を行う義務のある人々なのである。

此等の通信員は何れも共産主義者の囚人であつて、彼等は前述の職務と同監獄の『文化部指導者』の職務とを兼任してゐる。この文化部は餘り見當らない制度なのである。前に述べた人が澤山押し合つてゐる廣間の一つにおいて、或る吉日を選んでレーニン主義研究のために一つの協會が結成されるのだ。

この協會の會長は各種贗造又は恐喝取財のため刑を受けてゐる一共産主義者であり、その會員は『普通法』による犯人、即ち貨幣贗造者、強盜又はつまらぬ窃盜犯人である。このやうにしてレーニン主義研究に向はしめたこの美しい協會ができたのである。これで見てもロシアは監獄内でさへ主張の宣傳に如何に力瘤を入れてゐるか判明するであらう。

同様に秘密警察は囚人の生活やその將來の身の上についても關心を拂つてゐる。監獄はその秘密エーヂェントで一杯になつて居る。此等のスパイは大抵の場合彼等自身が囚人なのであつて、彼等は收監されてゐる同僚を告發して置きながら、出来るだけ早く彼等の自由を恢復することを希望してゐるのである。時々此等

の秘密エーヂェントは強制の下に、そして死の脅威の下に於いてさへ彼等の職務を遂行してゐるのであつて彼等のうちの或る者は命令に服従した後、良心の呵責に堪へず自殺をすることも稀ではない。

監獄の生活を完全に描寫するには不可避的に子供についても言及せざるを得なくなる。十四歳から十六歳に至る子供を澤山監獄に入れてどうしようとするのかは、正確に斷定することは出来ない。此等子供の大部分は、ボロを着て、大人と同じ制度の下に監禁されてゐるのだ。

この少年囚の無秩序ぶりは看守等もあきれるほどである。子供らはカルタをして遊んだり、お互の間で喧嘩をしたり、最も恥しい行爲に對しても廉恥心を起さず生活して居り、彼等の監房に這入つてくる看守に對して屢々狂人の如く飛びついてくるのである。

その結果看守達はその監房に這入るためには一打ばかりの鞭で身を固めて行くのである。その時には虐待された子供等の助けを求める恐ろしい叫び聲が監獄中に轟き渡るのである。この喚聲は、『レーニン主義研究會』會員が階級の敵と抗爭してゐるゲ・ベ・ウ賞讃の祝辭を囚人達の名において編輯することに多忙を極めてゐる丁度その時に聞えてくるのである。

第二十五章 ソフィア大寺院の爆破事件

バルカン一帯の赤化運動

次いでブルガリアの首都ソフィアの、中央大寺院爆破事件について話を進めよう。

由來ブルガリアを含むバルカン一帯は、ひと時ボルシエヴィキ運にとつて、國際資本主義抵抗力の最も微弱な地域だつた。成る程バルカン諸國には、革命の眞の擁護者であり眞の要素たる實業界や工業界に於るプロレタリアが實際少なかつた。だがボルシエヴィキに取つて都合の好いことに、此地方には、マケドニアの匪賊だとか、アルバニアの坊主だとか云う様な本來のプロレタリアに代る分子が多分に居たので、階級的闘争の諸法則により、このバルカン地方も他の地方と同様に極めて容易に革命を起し得るのであつた。一九二四年から翌二五年は特に、バルカン諸國のみならず歐洲各國の政治家、警察當局者に取つて、此赤化運動は恐怖の的となつてゐた。彼等政治家、警察當局者達は、若しもボルシエヴィズムが、バルカン半島に根を張る様なことがあらばその一角を起點として、ボルシエヴィズムは、容易にヨーロッパの他の地方に向つて革命の火の手を擴げ、遂にはヨーロッパ全部を赤化革命の焰で包み終るかも知れぬと考へた。

此バルカン半島赤化と云う重大な使命は、ゲ・ベ・ウに依つて、最も優秀な在外代表者の中から選び出され

たゴルデンスタイン博士、ヤロスラフスキー、エレンスキー及ルガノフスキーの四名に委嘱された。その中のゴルデンスタイン博士の爲人に就いては既に述べた通りであるが、他の三人は、この刀圭界の巨星として著名な婦人科醫であり、尙又密偵中のピカ一たる同博士の傘下で、直接その指令を受けつゝ活躍することゝなつた。而して彼等四人とも、バルカン諸國に出来るだけ近く、特に維納を中心として網を張ることになつた。その網と謂うのは、ソヴェートの在外大使館事務所以外ならぬのであるが、彼等はそこに、公式の公使、書記官、或は大公使館附武官として配屬された。

最初維納でゴルデンスタイン博士が高等政策に従事し、専ら赤化宣傳の大綱を畫策した後、之が實現化の爲め發令する一方、テロリストとしては第二流の人物たるルガノフスキーが、その補佐役として、色んな小細工を弄したり、紙幣を贋造したり、スパイを募集したりして居た。處が當時、ゲ・ベ・ウが軍隊方面の赤化に重きを置き、之が實現方を欲してゐたが爲めに、軍人の出身ではなく、從て、その方面の知識も經驗もない彼等二人は、ゲ・ベ・ウ本部のこの希望を満足させることが出来ず、バルカン地方だけでも大した成績を擧げることが出来なかつた。そこで彼等兩人のみに多くを期待出来ないと思つたゲ・ベ・ウでは、本職の軍人上りで、間諜問題や内亂問題に深い經驗を持つてゐるヤロスラフスキーとエレンスキーに、この方面の任務を委ねることゝした。茲に於て、エレンスキーは先づ在ワルソー市、ソヴェート大使館附武官として、密偵の職務を帯びつゝ旺に活躍し、その功績著しいものが有つた。處が、不圖したことから、彼の密偵行爲が露顯さ

れたため、遂に彼はポーランドの都に居れなくなり、今度は、バルカン地方の重要任地、維納に轉動させられた。次に、ヤロスラフスキーは騎兵戰並に内亂の老練な専門家として、ゲ・ベ・ウ、バルカン支部所屬となり、彼も亦樞要の地、維納在動となつた。斯くしてゲ・ベ・ウはバルカン諸國に程なく革命が勃發して、諸國內に内亂状態となつて現はれることゝ信じ切つて、その時節の到るのを鶴首して待つてゐた。

案に違はず、ヤロスラフスキーとエレンスキーと云う強者どもの協力を得たゴルデンスタイン博士は、ルガノフスキーと共に維納で大活躍を始めるに至つた。彼等四人共日夜不眠不休全力を傾注して赤化の促進を目標して奮進した。然しバルカン諸國の状態は彼等の豫想に反して、複雑を極めてゐるので、簡單には手がつけられなかつた。而してバルカン通のゴルデンスタイン博士を除いた三人は、運動に著手早々迷ひ始めた。彼等は何うしたら良いのやら判らなくなつて狼狽し出した。その傍で唯ゴルデンスタイン博士だけが馬鹿落著に落著拂つて、依然悠然と高等政策に従つてゐた。彼は徐々にバルカン方面の革命工作を基礎づけてゐたのであるが、僅々三年の間に、その大事業のため、二千萬マルクも消費し、且同半島にソヴェート州を建設すると稱しては、右の三倍程の巨費を注ぎ込んだ。そのお蔭で、エレンスキー、ヤロスラフスキー及ルガノフスキーの三人は、纏て、アルバニア坊主ども及マケドニア無頼漢どもと云ふ、變てこな共產主義者ではあるが、バルカンのことなら手に取る様に精しく知つて居る奴等と關係をつけることが出来た。勿論彼奴等はゴルデンスタイン博士の撒いた、二千萬マルクの中大口の分前を貰つて、共産黨員になり濟まして居る御都

合主義の共産主義者に過ぎないのである。而して彼奴等の手傳で、ブルガリアにごろ／＼して居るマケドニア遊民の幾組かを手に入れたヤロスラフスキー並にエレンスキーの内亂の二大家は、此等烏合の衆を維納に糾合しては、兎も角軍事教練をしたり、スパイの訓練をしたり、擲彈や自動電氣爆彈やらをも製造させたりして居た。

狙はれたブルガリア

斯くしてバルカン半島の形勢は頓に悪化して來た。彼等の先づ目に附けたのは當時大戦の創夷未だ癒えず、国力全く疲弊し、絶えず政局渾沌と國中不安の雲が漲つてゐたブルガリアであつた。彼等が其處で革命のトップを切るべく槍玉に上げ様と云うのが、若きブルガリア王ボリス陛下なのであつた。このボリス王を、尙かつ、あは良くば政府首脳部連諸共に、電氣爆彈で一舉に遣つ附け、その陰謀の混亂に乗じて、政權を奪ひ取り、國內を擾亂状態に陥れて、革命を捲き起し、延いてはその革命をバルカン地方全體に及ぼさうと云う魂膽だつた。これに使用する電氣爆彈は、技術家のヤロスラフスキーが自身で念入りに拵らへた。而して皆で首府ソフィアに持ち運んだ上、徐に機を熟するのを待つたのである。

やがて絶好の機會は到來した。それは一國務大臣が在職のまま逝去し、國葬の禮を以て弔ふこととなり、かつ國王以下内閣々員一同が參列すると、電氣爆彈は、そこで、直様、その葬式が行はれるソフィア大寺院

内に、密に据付けられた。若し之が巧く行つたら、人も知る戦慄すべき威力を有する爆發力のため、さしもの大伽藍の圓天井は、立どころに崩壊され、國王や多くの顯官達や、婦人、子供や、而して僧侶達やら其場に居合はせる人々は一人残らず、無残にもその下敷となつて、焼き殺されて了うであらう。處が幸か不幸か、運命の神の戯れとも云はうか、電氣爆彈は、僥幸にも、國王の鹵簿が到着する前に爆發したので、大寺院が爆破されたのみで、國王その他、殺戮の目的は全然畫餅に歸し、革命は起らずに済んだ。

斯くして、一億マーク近くの莫大な資本を投じながら、何等の効果も擧げ得なかつた此ソフィア大寺院爆破事件は、ゲ・ベ・ウのバルカン地方に於ける活動の絶頂と、その無能さ加減とを明かに物語つて居るもので、それ以後と云ふものは、彼等ボルシェヴィキ連もバルカン地方一帯を國際資本主義の微弱な地點とは最早見做さなくなつたのである。

爆彈四人男の末路

以上の様な有様で、ゲ・ベ・ウ本部を失望の淵に陥れたこのソフィア陰謀未遂事件の結果、例の四人男は如何なつたか？ これを探究するも一興であらう。

先づゴルデンスタイン博士であるが彼は些細な手違から斯かる大計畫が失敗に歸したのを慨然としたが、今更如何とも詮方なく、此上は維納は勿論、バルカン地方には居たたまらなくなつて、遂に旗を卷いて悄然

と獨逸に逃げ込み、ベルリンのソヴェート大使館の厄介になつた。次にルガノフスキーとエレンスキーの二人は罪惡が露顯して、告發されるのを慮れてか、變名した上何時の間にかバルカンを遁れ出て、佛蘭西方面に姿を隠した。最後のヤロスラフスキーは、事件直後の或朝維納の自國大使館から姿を消したまゝ再び歸館しなかつた。彼は『最早ゲ・ベ・ウの現役將校として活動するのを斷念して、獨逸に行き、單なる一工場労働者となつて餘生を送ることに決心した、但しさりとしてゲ・ベ・ウの秘密をば發く様なことは斷じてせぬことを誓ふ』旨を認め、ゲ・ベ・ウ本部宛の書面を自分の事務机の上に遺して行つた。

かうなると、ゲ・ベ・ウ本部は俄に騒ぎ初めた。この一本の手紙は流石のゲ・ベ・ウを驚愕させ、狼狽させた。これはソフィア大寺院崩壊事件がブルガリア全國中に與へた人心の恐慌より以上のものであつた。何となれば、ヤロスラフスキーはゲ・ベ・ウの急所を握つて居るからである。ゲ・ベ・ウ本部は、直に緊急動議を幹部會に提出して、ヤロスラフスキーに死刑の宣告を與へしめ、その判決執行方の役目を、彼と水魚の交を結んで居たゲ・ベ・ウ部員のトリリツセルと稱する男に命じた。

トリリツセルは遙々獨逸の國へ出掛けて、是も亦職口を捜す労働者に扮し、ヤロスラフスキーの働いて居る工場を探し廻つた。そして探し出された彼ヤロスラフスキーは前非を悔悟し、今日ではもう全く淳朴な一介の労働者となつて、轉向後の生活をして居るのであつた。久し振で遭遇した彼等兩人は、手を取り合つて喜びつゝ、直ちに舊交を温めるべく、とある一軒の居酒屋に入つて行つた。而して安酒に咽喉をぐうぐう鳴

らしながら、お互に、過ぎ來しかたや身の行末や、世間話や神様の話や、それから、戦争や革命の話から戀愛の想出話などに至るまで、四方山の話に、以前から相許し合つて居る此二人は、一入打ちくつろいで談笑して居る間に、隙を窺つて居たトリリツセルは、何時の間にか、相手のコップの中に毒藥を注入した。知らぬヤロスラフスキーは何心なく、自分のコップを飲み乾し、その日の夕暮時、何の造作もなく、死んで了つたのであつた。

翌日その町の役場内の、身元不詳死人預所に搬ばれたヤロスラフスキーの遺骸に、近づかんと一念から、『不憫な親友との一生のお訣れに何卒何卒たつた一目……』と空涙を流して吏員に哀願したトリリツセルは、お粗末な祭壇に安置された遺骸の在る室に入るや否や、邊りに人氣の無いのを幸に、手早く屍を寫眞に撮つた。ゲ・ベ・ウ本部は脅威を感じたヤロスラフスキーの死體の寫眞までも強要したのである。思へば全くの己等の氣休めのために過ぎない。

これが、その昔帝政時代の天晴雄々しき近衛士官、次には卑怯な精神的弑逆者となり、曾ては内亂の専門家として野心満々たりし、剛毅なゲ・ベ・ウ部員のヤロスラフスキー、本名ネステロウイツチの最期であつた。而して彼の様な死に方が、ゲ・ベ・ウ部員としては通例であつたのだ、即ち——ゲ・ベ・ウ部員は、若し敵手に斃れない場合は、ゲ・ベ・ウ自體の毒牙にかゝつて死んで行くのである。

第二十六章 クーチエポフ將軍の誘拐

ツァー時代の殘黨白晝「軍人聯合國」

更に最近世人の心膽を寒からしめた一事件に話を移さう。今から僅か數年前、一九二九年から一九三〇年に掛けて、ヨーロッパの眞中、パリで突發した彼の白露軍の亡命者、クーチエポフ將軍のいとも玄妙な誘拐事件である。

曩にロシアに於て、帝政瓦解の際、今ぞ時めく諸國務大臣を初め、文武の顯官や宮内省のお歴々達に至るまで、さしにも鴻大なツァーの御代の皇恩を、何の良心の呵責もなく忘れ果て、相競うてソヴェート聯邦共和國の新政權に誠實奉仕する旨の宣誓を、平氣で續々とやつたものである。従つてひそかに、前帝に忠誠を披瀝して、虐政のために志を枉げることを潔しとせず、男らしく新政權に反抗した人々は、軍人中でも極めて稀であつた。その忠勇な軍人達の中に、近衛聯隊附のクーチエポフ大佐と云ふ將來を囑望された、未だ働き盛りの將校が居た。彼は國內の革命勃發の折も、又それに續く内亂時代も、終始一貫して、白露軍の第一線に立つて、非常な危険を冒しつつも、勇敢に奮戦したものだ。而して彼が少將に昇進した頃は、不幸にも白軍側の力盡き果て、最早故國に踏み止まる事が出来なくなつたため、彼は殿軍を承つて男爵ウラ

(200)

ンゲル將軍麾下の殘兵と共に、涙を呑んでロシアを去つた。

彼等亡命軍人の落行く先は、先づトルコであつた。次に彼等はバルカン方面へ流れ込んで行き、それから順次に、三々伍々、ヨーロッパの各國へ向けて擴がって行つた、事實この様に、表面に於ては、散りぢりばらばらになつて居るものゝ、裏面では、水も洩らさぬ密接な聯絡を保ち合つて、立派な一箇の軍隊を形成してゐたのである。殊にバルカン地方では、士官學校を建てたり、實地教練をやつたり、新兵を徵集したりして、他日の準備をするに寧日なく、孜々として怠りなかつた程だ。彼等の總司令官は、國外亡命後も引續き、ウランゲル將軍であつた。而して彼の統率の下に、その秩序あり訓練ある堂々たる正規軍は、ロシアならぬ異國間に、永久不變に現存して行く様に見える。この軍隊は現在では、『軍人聯合國』とも謂うべき名稱を有し、白露軍人中の首席將校が、常にその團長格となつて、總司令官としての絶對的操縱權を賦與されるのである。ゲ・ベ・ウはこの強大な、紀律正しい白露軍隊が、何時不意に猛烈な勢で、ボルシエヴィズムに對して、叛旗を翻して来るかも知れぬとの觀察から、多大の勢力と莫大な金錢とを費して、白軍の組織破壊方に盡力したのであつたが、然し彼等の折角の努力も全く水泡に歸した。

そこで、此上は、巨魁のウランゲル將軍の存在を無くするに如くはないと考へ附いたゲ・ベ・ウはその手先を使つて、無道にも同將軍を毒殺せしめた。亡き同將軍の後を繼いで、海外での唯一の白露軍の衆望を双肩に擔つて、その總司令官になつたのが本章の主人公クーチエポフ將軍である。

赤衛軍買収の戦術

彼クーチエポフ將軍は、參謀本部並に經理部を、全歐に於ける落武者の集合の都、パリに置いて、其處からヨーロッパの四方八方へ命令を出して居た。而して徐に好機を窺つてゐたクーチエポフ將軍は作戰計畫として、先づ、相手方ボルシェヴィキ連、特に赤軍將卒を買収して、彼等と氣脈を通ずるの戦術を用ひた。その爲めに味方の優秀な士官達を、その頃歐洲に於けるゲ・ベ・ウの中心地點となつてゐた柏林方面は勿論、ヨーロッパの諸々方々へ密派して、頻りに在歐赤軍々人達と交際させ、段々と買収策を講じさせた。現にロシアへも、數回人を忍び込ませたことがある位だ。斯うして、平生良く訓練された、秩序正しい味方の士官や將校達の、命を的にしての大活躍のお蔭で、此第一戦術に幸にも大成果を收めたクーチエポフ將軍は、今度は態々自身が獨逸に潛み込んで、柏林で、豫て示し合はせて置いた、赤衛軍參謀のポポフ及ロベルチ兩士官と落合つた上、對ボルシェヴィズム作戰方法に就いて充分に密議を凝らした。而して慎重審議の結果出來上つた周到なる戦術と、精練せられた忠勇無比の士卒とを兼ね備へた白軍の陣容は、寔に堅城鐵壁とも謂うべきものであつた。

茲に於てかゲ・ベ・ウ本部は、他日いざ鎌倉という際には、ボルシェヴィズムを擁護し得る只一つの勢力である。命の綱と頼む赤軍の絶對保全を冀つて、クーチエポフ將軍の裏面的策動の裏を掻こうと決意した。い

ふまでもなく、ウランゲル將軍で味を占めたゲ・ベ・ウは、現在の眼の上の瘤であるクーチエポフ將軍の暗殺をたくらんだのである。この陰謀の實現方の任務は最初、その頃在外ゲ・ベ・ウの活動中心地點と見做されてゐた柏林のゲ・ベ・ウ支部に委嘱され様とした。而してその話が立所に、噂に噂を生んで、同市のゲ・ベ・ウ秘密結社は危く假面を剥がれかゝつた。そこでびつくりした同支部では、白衛軍の將校達の命を全部合せたよりも自黨の結社の存在の方が餘程大切だと云う理由で、當時同支部詰となつて居た例のゴールデンスタイン博士を初め、擧つて右の案に反對した。それがために、同支部委嘱案は取止めとなつた。而して一時は内輪の者の間でも、クーチエポフ殺害の計畫は話頭に上らなくなつた程であつた。處が廳て又復同將軍危機に瀕すとの風評が起つた。誰か同將軍に贈つたウオツカの瓶中に毒藥を發見したとも傳へられた。その殆ど全部が白軍士官である。幾千人の、パリの露人タクシー運轉手は、そこで自分等の指揮官を保護するため、交代で同將軍を警護し合ひ、又將軍がソヴェート士官との密會のため、單獨で出て行く時の外は、必ず一臺のタクシーが彼を護衛して歩いた。

姿を消したクーチエポフ

恰も一九三〇年一月二十六日の事である。同將軍は午前十一時頃我家を出たきり、二度とその勇姿を現はさなかつた。パリの警視廳と露國人團體とに此變事が急報された。而して最初は巴里市中を、次にフランス

國中を、遂にはヨーロッパ中を夢中で、將軍の數千に上る足跡を探索した、世間では、同將軍が灰色の自動車に乗らうとする所を見受けたと云ひ、或はフランスのノルマンディ地方で、いやフランス北部で、いや南部地方でも、鎖鑿きになつた將軍を乗つけて快走する灰色の自動車を見た者が有ると云ひ騒がれた。日中パリの市内で公然と將軍を誘拐！ この事變は人心に異常なセンセーションを與へ、各新聞雜誌や一般公衆の憤慨はその極度に達し、全力を注いで真相摘發方に努力して居る各地の警察署も、何せよロシア人の慣習、とりわけて、ゲ・ベ・ウの遣方に精通して居ない所から、夜を日に繼いで搜索も、何等効果を齎さないものであつた、が只『クーチエポフ將軍はパリのゲ・ベ・ウの手で誘拐された』と云ふ一事が判明してゐた。凡ては謎なのである、而して徒に月日は経過して行つた。

纏て流石の警察側も麻痺をきらし初めた頃、突然この神秘的謎を解き得る一人の男が現はれた。彼は刑事でも密偵でもなく、又士官でもなかつたのであるが、その名は犯罪學史中では、人氣者として知られてゐる。それは他でもない著名な新聞記者のウラヂミール・ブルツセフその人であつた。彼は本件の真相探求のため、長時日を費して歐洲の各地をば、今日はパリ、明日はベルリン、翌日はワルソー、維納など、幾回となく歩き廻つた。或時は共產黨員や赤軍士官連と、又或時はごろつきの親方どもと秘密の裡に會合したりして居た。かくて丁度七ヶ月の後、パリの新聞記者達を一堂に集めて、事件の経緯に就いて次の様に語つたのである。

『クーチエポフ將軍誘拐の責任は、抜け駆の功名を欲したゲ・ベ・ウ・パリ支部に歸すべきものである。而して主なる關係者は、オルロフ、ミカイロフ、ヤノウイツチ夫妻、アレンス、エレルト及ヘルフアンドの六名で、その全部が何れも在パリソヴェート大使館員なのだ、然しドフガレフスキー大使並に他の館員は此度の陰謀には無關係なのである。』

扱て誘拐手段は斯うして行はれた。本年の去る一月中、モスコイ參謀部附士官二名が、パリに到着して、種々密談したいと云ふ秘密通知を或日のこと受取つたクーチエポフ將軍は、飛び立つ程喜んで、單身會合所に赴くことを約した。而して約束の日の同月二十六日の朝十一時に、將軍は家を出て、會合の場所と決めてあつたモンバルナス街と之に隣接するいま一つの通との角へ行つた。丁度その時、街を流して居たタクシーの露人運轉手が、其處を通りすがりに將軍を見受けたのが最後だつたのである。將軍は暫くその辻で相手を待合せて居た。そのうちに問題の二士官は來ず、一名の見も知らぬ男が近づいて來て、將軍に一寸合圖をした。此男はゲ・ベ・ウ部員なのである。彼が將軍に言うには『御約束の二士官さんは閣下と街中で面會するのを憚つて、御二人の宿に閣下の御來訪方を懇願して居られますれば……』と、將軍は點頭して彼の後に續いた。彼等はウーディノ街の邊りに待つてゐた一臺の灰色の自動車に乗つたと思ふや否や、扉が閉まつて、車は全速力で走り出した。自動車の奥深くには、ゲ・ベ・ウ部員の數名が隠れて居たのだ。

同將軍は、直様鎖で手足を縛られ初めたので、烈しく抵抗した、め遂にクロロホルムを嗅がせられた。自

動車は、ゲ・ベ・ウ・バリ支部の隠家の前で停つた。其處で部員共は同將軍を訊問する腹案であつたのである。處が彼等が呆氣に取られて仕舞つたと云うのは、將軍が既に息を引取つて居たことに氣附いたのだ。クーチエポフ將軍は、平素から心臟病を患つて居たので、極く少量の癡醉薬でも、就中クロロホルムには堪へ切れなかつたのである。

將軍の行李詰め遺骸

クーチエポフ將軍の思掛ない最期は、決してゲ・ベ・ウ首脳部の眞意ではなかつた。首脳連中は、彼を本國に連れて還らせたいへ、白晝軍と國內や在外の赤軍、その他の多方面との結束を、親しく告白させたかつたのである。所が豈圖らんや、過失とはいへ、斯かる早計な殺害事件を惹起した事はゲ・ベ・ウの汚行や醜態を暴露するのみの結果となつたので、彼等首脳連は云うも愚のこと、ソヴェート界限では一大パニックを醸した。彼等ソヴェート連中の誰もが一番慮れたのは、フランスとの國交斷絶であり、第二には、今日迄苦心慘愴して、辛うじて築き上げた海外に於ける自黨の地盤を、全く失ふことになるかも知れぬと云うことであつた。次に先決問題として、在パリ自國大使館事務所が、在住白晝避難民の襲撃を受けるのを豫防するため、急遽その建物をば鋼鐵板で固め、秘密通路口を鐵扉で閉め切り、屋根裏に大使室として、特に装甲した一室をしつらへたりした。

ドフガレフスキー大使は、あはて、館員一同に、若し警察の手が入つた際には、クーチエポフ將軍は大方ニコラス大公一味の者等か乃至は英國の石油王、サー・ヘンリー・デターディングの煽動の手先連中に誘拐されたのだらうと云う説を押し通すべき旨を嚴命した。何が故に一大公たり、一石油王たるものが、反ボルシェヴィキの一將軍の誘拐などに關はるものか？ との疑問に對しては何等答へる者が無いのであつた。退引ならなくなつて來たゲ・ベ・ウ首脳連中、スターリンは、クーチエポフ將軍の遺骸を露國々境へ搬び來させた上、直に、彼が無理に入國しようとしたため、國境警備兵の手で、遂に斃れたといふ風説を立てることを提議したが、用ひられずに終つた。

そこで最後の方策として、同將軍の屍を大型の柳行李に詰め込み、外交文書携帶使者として、例の六人組の一人、ヘルファンドバリ大使館附武官が、本部への巨細の報告を兼ねて、それを護送しながらモスコへ輸送する事となつた。而してクーチエポフ將軍の死骸が同地著の上は、ゲ・ベ・ウ幹部連の面前で、素早く茶毘に附されたのである。

尙又悪事の發覺を怖れた彼等ゲ・ベ・ウ首脳部連は、事件關係の證據湮滅のため、本件に連累した部員を地位の高下を問はず、皆一人づゝ本國へ召還しては、モスコで銃殺した。只その中で一人だけが、奇蹟的にこの恐るべき稠密な魔の網の目から逃れ得た男があつた。自分(ブルツェフ)に此度の怪事件の眞相を傳へて呉れたのは、實にこの男であるのだ』云々と。

忠勇鬼神をも泣かせたクーチエボフ將軍は、斯くして、永久に草葉の露と消えて行つたのである。然し右ブルツセフ記者の探訪情報に據れば、ゲ・ベ・ウは、年々實に三千万弗近くの巨額を投じてまでも、反革命派の主要分子撲滅策に腐心して居り、その厄介拂の方法としては、今回のクーチエボフ將軍の場合の如く、又は其前任者ウランゲル男爵の如く、或は誘拐、或は毒殺と云う様な、千扁一律の、悪辣極はまる常套手段を以て終始してゐるのである。

第二十七章 特別任務部隊チオン

ゲ・ベ・ウの前衛

ソヴェイト・ロシアに、ウオーフルと稱ぶ國內警備部隊と、他の別動隊即ちゲ・ベ・ウの軍隊とから成る『チオン』といふ特別任務部隊があるが、此部隊は前のチエツカ作戦部に源を發しそれが發達變遷して來たものである。今日では幾つかの軍隊的編成から成つて居り、參謀本部の命令下にあるのでなく、直接ゲ・ベ・ウと黨との指揮下にあり、經費等も其處から支拂はれてゐる。此部隊の任務は舊帝政時代いへば帝位の守護に當つてゐた親衛隊のやうなもので、戦時戦線に立つのを目的とせず、國內における特別任務を帯びてゐるものである。即ち職務によつて特別の班に分れ、例へば政府役員が鐵道旅行をする場合護衛するとか、政府のガレーヂを監視するとか、クレムリンを警備するとか、又は政府首脳部の人々の身邊を警戒するとか、それれに適當に訓練教育されてゐる。

然しこれは只職制上かうしたものであるといふだけで、實際チオンの負へる任務は尙一層重大なものである。ゲ・ベ・ウの指揮下にある此部隊のほんとうの目的は、鐵道や其他の警備監督だけでなく、國內に潜むソヴェイトの敵を打倒壊滅せしむるにある。即ちソヴェイト政權の親衛隊である。コーカサスに暴動が起きた

とか、軍隊の或部隊が叛旗を翻したとか、農民が穀物の引渡しを拒んだとか、かうした場合に此の『特務部隊』の出動を見るのである。それで一言にして云つて見るとゲ・ペ・ウは共産黨の前衛であるが、チオンは其ゲ・ペ・ウの前衛だといふことになる。

其兵士どもは青年共産黨員の中から豫め選ばれ、黨の爲には献身的の努力を盡すべきことを誓つた者から採用されたもので、内亂の爲に親兄弟や近親の者の亡くなつた、單身で自由奔放な境涯の青年が撲ばれてゐる。其数は十萬に達し専らゲ・ペ・ウとボルシエヴィズムとの守備にあたつてゐる。

第二十八章 ゲ・ペ・ウの記念祭

『最高道徳は沈黙にあり』

顧みればゲ・ペ・ウも既に十幾年の歳月を経て來たが、其功績を稱へ勞をねぎらう爲に、普通の人の世の記念祭と同じやうな祭典が催されてゐる。チエツカが創設されたのは一九一七年十一月七日であつたが、ソヴェート警察が暴露した、あのラムジン事件の記念の日をとつて、十一月の十九日を此祝典の日と定め、十周年記念を一九一七年に、十三周年記念を一九三〇年にとり行つた。ゲ・ペ・ウではお祭り騒ぎをすることを避け、家族的といつたやうな極く親善的な氣持で、政府委員達の祝詞や、演説や、簡単な宴會などが當日行はれる。

一九一七年の十周年記念日の朝、モスコの赤廣場に大閱兵式がとり行はれ、輕砲兵、騎兵、歩兵が、立派に飾られた祭壇の前に堵列し、それに政府委員や政治警察の高等役員等が出席して、其所に展開される光景は實に堂々たるものであつた。スターリンが政府を代表して世界を震駭せしめた革命軍に對し、平靜なる態度で閱兵を行う。マトシヤンカの特別軍が現れると一入滿場はどよめくが、此軍隊は内亂鎮定のためにマフノウによつて創設されたもので馬が機關銃を洩いてゐる。

『最高道徳は沈黙にあり』

閱兵式が済んでからゲ・ベ・ウの此祝典を機に招集された労働組合及び黨の代表七千名が會堂に集り、先づ中央執行委員會議長のカリニン、次いで陸軍大臣のヴォロシロフの演説があつた。兩氏とも全くソヴェート革命の權化であり、ゲ・ベ・ウを導いて來た忘れられない功勞者である。

最後にゲ・ベ・ウの指揮者メンジンスキーが演壇に立ち、インターナショナルの句調で以つて先づ多數參列者に謝意を述べ、簡單にかう云つた『チエキストの最高の道徳は他に非ず、それは沈黙にある』と。チエツカは誓言を好まないといふのである。それから出席者一同が起立し、メンジンスキーがチエツカに對するソヴェート聯邦の感謝を公文書で讀みあげたが、其文書の末尾はかう結んであつた『ゲ・ベ・ウは革命の守護者であり、プロレタリアの不屈の劍である』と。

當日の新聞は特別號を出し、繪附録を添へ、ソヴェート建設功勞者、特にゼルジンスキーの寫眞などを掲げ、祝辭、回顧、希望などの記事で充たされてゐた。

第二十九章 世界赤化の陰謀

頭腦をもぎ取られたロシア人民

秦の始皇帝は萬里の長城を築いて國を圍つたが、この建設には幾百萬人の生命を犠牲にした。ゲ・ベ・ウの長城も全く同じであつて、それは幾百萬の屍の上に打ち建てられてゐるのである。始皇帝以來幾星霜を経た今日では、もはや石と粘土の城壁も全く無用の長物となつてしまつた。勿論ゲ・ベ・ウの城壁は目にこそ見えないが、指でその土臺に觸れることができるのだ。それは世界で最も高い壁であつて、血と死の上に、殺人と拷問の上に打ち建てられてゐる。

それはロシアを取り圍むヴェールの壁であつて、その壁を透して時々外部の光線が入るので、二重の圍のある壁の下にある感がするのだ。囚人が絶望的な眼ざしを天に向ける時には、この壁は無限の高さとも見える。ゲ・ベ・ウはこの壁に根據を置き、ヨーロッパ及び地球上のあらゆる大陸を蔽はんとする陰謀を不屈不撓に防いでゐるのである。

敵は日に日に弱つてゆき、抵抗する回数はだんだん少なくなつてゆく。自發的か、厭々であるか、意識してゐるか、してゐないかは別として、陰謀に負ける人々の數は増加してゐる。即ち、インテリ分子、作家、

實業家、學生、ツリーリスト、ジャーナリスト、活動俳優、更に幾多のソヴェート・ロシア友の會員、一口に云へば、ゲ・ベ・ウの秘密室に行はれてゐることを知りたいといふ何かの名目に憧れてゐる總ての人々がさうなのである。

言葉において、著書において、思想においてソヴェートに支持をさへ與へてゐる人々、或はソヴェートにつき深く考察せずして、單に世界の民衆を相抗するやう煽動するためにその能力を使つてゐる此等の人々は、何れもヨーロッパに對するソヴェートの貴重な味方であり、その補助者であり、無俸給の兵士なのであるが、彼等はそれについて屢々疑ひさへ挟まない。外見は政治に全然關心のないかうした事實が、ゲ・ベ・ウの水車場に水を送るのである。なぜなら、ゲ・ベ・ウは自分の利益には敏感であつて、何でも利用するからである。宗教上の争ひ、出版された著書、地震、飢饉、銀行の破産、戯曲、暗殺、展覽會等々は何れもボルシエヰイキの陰謀家にとつて好機なのである。彼等はあらゆる出來事を利用し、それを自分の利益になるやうに變へ、それを成功として記入するのである。

例へば、一人のブルジョア批判家が反ソヴェートの著作を攻撃したり、アルバニヤの主教が同信徒團に破門を行つたり、改宗者が同性愛の権利を要求したり、工業家が報酬につき議論したりすることは、何れも、ゲ・ベ・ウにとつて勢力と影響力を與へる媒介物となり得る。かうしたことは革命の水車場に水を送ることなのだ。だからゲ・ベ・ウはかうしたことに援助を惜まない。同性愛宣傳の資金がソヴェートから支給されてゐる。

た一事によつても這般の消息は明瞭である。

以上の如く、ゲ・ベ・ウの仕事は少しづつ擴大され、何事にも手を出してゐるのだ。もはやその短所を攻撃してゐる時ではない。階級闘争は、現在の如き文化的な社會では、全く不可避的な事柄である。而もゲ・ベ・ウは攻撃する好機を待つてゐるだけであつて、多くの經驗を積み、賢明になつたので忘れられない一九一七年の十一月の革命を繰返へさうとしてゐる。而も今度は世界的規模でそれを遂行せんとしてゐるのである。

否、既にゲ・ベ・ウは高架索に打撃を與へ、相當な効果を收め、支那の中心に達し、ヨーロッパに對しても再び攻撃を開始した。といふわけは、ゲ・ベ・ウにとつては西洋の道は東洋に通じてゐるから。

秘密警察は世界革命の前線である。それは組織的要素でもなく、革命の補助者でもなく、實に革命そのものなのだ。秘密警察にとつては闘争は終つてゐない。それは引續き敵に對して再三再四の攻撃を加へボルシエダイズムが最後の勝利を得るまで革命的行動を貫徹するであらう。ゲ・ベ・ウは革命の手にある短刀なのだ。この短刀は鋭く、而も純鋼鐵で、固く手に握られてゐる。この短刀で何をするかは、それを握つてゐる手、即ち、共産黨政治局のみが知つてゐる。然らばこの手は何を欲してゐるか？簡單ではあるが、大きいことである。それは幾時代以前からの相對峙せる二つの世界を一つに接合せんと欲してゐるのだ。即ちアジア的集團主義とヨーロッパの文明とを今度こそは不滅な渾一體に融合せんと欲してゐるのである。

勿論これは今に始まつたことではなく、古來屢々試みられたことである。例へば成吉思汗もターメランも

比々みな然りである。しかしボルシエヴィズムは世界的規模で且つ武器を手にしてこの試みを再び始めてゐるのだ。マルクス主義の信仰は過去のものとなつて了つた。各人が必ず幸福になる樂園を建設するといふアジア的な古い思想はボルシエヴィキが行つてゐる以上に狂熱的熱情を今日では何人によつても保持されてゐない。ボルシエヴィキが新しい宗教の創造者と考へられるのはかうした意味からである。彼等が戦つてゐるのは、経済組織のためでもなく、また國家形態のためでもなく、新しい仕組の上に世界を改造するためなのである。

然るにかくの如き人間社會は生れないだらうし、自然發生的に生れ得るものではなからう。それは人爲的な計畫であつて、それがための苦心努力は正にゲ・ベ・ウの血まみれの坩堝の中で實行されてゐるのである。外國のあらゆる不純物を避けるためには外の世界の如何なる風評、如何なる言葉、如何なる思想も無統制のまま、ロシアに入れてはならぬ。抵抗のあらゆる可能性をもぎ取られ、外部で何が行はれてゐるかは全然目に見ず、耳に聞かないロシア自身は、政府が實行することを適當なりとするあらゆる試みに一切合切委せきりなのである。

此等の試みのうちでの最初のものは、言葉において、行動においてそして思想においてさへ、些かたりとも抵抗の様子があれば、先づ以つて之を撲滅することであつた。次いで人民の肉體自身に對する試みが開始されたのであるが、それは十ヶ年以上も持續され、結果が既に現はれてきた。人民はその本質が變つて了つた。

それは頭腦が取り去られた肉體なのである。頭腦や知能はチエツカの牢獄の中で破壊されて了つた。人民は思索の機關を失つて、思索することを忘れて了つた。彼等は働く以外に何も出来ないものと化して了つたのである。

ロシア國民の間に知能が消失したことは、ゲ・ベ・ウの政策による明白な最初の影響である。ロシア人種はもはや以前と同一のものでなく、その外觀さへ變つてゐる。以前に見られたやうな晴れやかな顔をした人間が非常に少なくなつた。精神のない、ごつごつした、よせ集めのアジア型の人間がこの國を侵略した。貧弱で、眼界の狭いこのタイプの人間は命令されるまゝにロボットの如く動く。彼等は辛抱することや、服従することを知つてゐる。もし彼等が命令を受けるなら、ハッキリした自覺なくしてボルシエヴィズムの建設を實行すべく雪崩を打つてヨーロッパに進んで行くであらう。

これを要するに、今日のロシア國民は一つの大きい機械か、蒸氣機關車のやうなものであつて、その中にあつてアジア的なボルシエヴィズムは、レールの上を密集して進ませる制動機を握りしめてゐるやうなものである。

併しさすがのゲ・ベ・ウも次から次へと際限なく續くテラーや、飢饉のため、おのれ自身も押しつけられ氣味で、今は徐々に『人道』に向ひ、強制的に幸福に向つてゐるが、これは永久に干からびた心から、痲痺せる精神から出てゐるのである。ロシアを敵うてゐる硝子の鐘は、いつになつても硝子の鐘にすぎないことには

變りはない。結局一撃の下にそれをたゞ壊すことができる。ゲ・ベ・ウはこの硝子の鐘が不用となる時に、始めて自分の仕事を終りを告げるであらうといふことを百も承知してゐる。その時まで、云ひ換へれば、外部的情勢がその成功を危うする限りは、ゲ・ベ・ウはその仕事を終了したとは考へられないといふわけである。

さて機械は休止することなく運轉して居るが、この機械の燃料は人間の肉なのである。そしてその機關士は忠實な勤務人であるが、強制された彼等の忠誠には精神的熱意が缺けてゐる。廣大な帝國の獨裁王たるスターリンは、しつかりその手にロシアの行くべき方向を握りしめて居り、舊世界の撲滅といふ目的の上にその目はちつと向けられてゐる。

スターリンはゲ・ベ・ウといふ複雑な機械を巧みに操縦してゐる。そして又この機械は極めて御し易い。即ち、政治的警察は盲目的に服従してゐるのだ。ゼルジンスキーが個人的にテラーの責任を一人で引き受けてゐた時代は實際に過去のことである。今日ではスターリンがその絶對的服従を要求してゐるのだ。その代り彼はどんな苦しい仕事にも堪へて行くのである。しかも彼はかうした仕事を手輕に堪へて行くのだ。といふのは、ゲ・ベ・ウの遂行してゐるあらゆる行動やあらゆる處刑は革命の達成された日、即ち全人類が彼の覇權の下に屈服する日には、勝てば官軍で、それらの事が正當な行爲となることを知悉してゐるからである。ところがスターリンの希望では極めて接近してゐるが、實際には遠い將來に屬するこの日を計算して誰が生き永らへてゐるだらうか？ その時にはこの大きい事業は完成されるであらう。即ち、多くの努力を拂つたか

の陰謀がその目的を達成し、テラーはそれより以後は人類によつて反對を受けずに承認されるであらう。これこそゲ・ベ・ウの希望であり、またその理論なのである。しかし實際に照して見てかうしたことは凡てどうなつてゐるであらうか、甚だ疑はざるを得ないのである。

ロシアとアメリカ

十數ヶ年間も努力を拂つた後でも、未だかの陰謀は熟してゐないし、ゲ・ベ・ウ自身さへいつそれが熟するだらうか知らないし、いつ世界革命が勃發するだらうか、いつ舊世界が顛覆するだらうか、云へない。しかしながら地球上の他の國から孤立してゐる硝子の鐘の下に、ロシア國民はこの十數ヶ年の間どんな生活をしてゐたか？

ボルシエヴィズムの輪廓は明瞭となつてきた。その顔貌は歐亞雜種となつた。それは蒙古人のしまつた目にヨーロッパ人の我の強さうな頤を合せてゐる。更に歴史と云ふ見地から觀察すると、ボルシエヴィズムは次の如き全然別個な四要素の混合から生じてゐる。即ち、アジア的な野蠻性、東洋風の宿命説、ヨーロッパ人の反抗的精神及び西洋諸國民の冷酷にして理性的な革命的イデオロギーこれである。再びこれについて、この奇異な合成物は歴史家にとつては未知數ではないことを茲で注意を促して置きたい。

曾てロシアはそれと同一な過程を通過してゐる。かの廣大な領土には文明といふ花に觸れなかつたアジア

人種たるスラブ人、タタール人、蒙古人が住んでゐる。ところへ革命的酵母がヨーロッパより持ち來され、ために強いシヨクを興へた。今日ではわれ／＼は恐ろしい動亂を伴ふ同化作用を蒙つてゐる。この事實から、思想はその姿を消しつゝあり、既にそのオリジナルな性質を失つて了つた。この思想はもはやヨーロッパ的なものではない、その思想を同化してゐるアジアの諸國民もまた、古來の純粹なアジア人ではなくなつたのである。

さて何か新しいものが實際にゲ・ベ・ウの坩堝において形成されてゐる。この世界は歐亞雜種の新アメリカの一種である。それは廣大無限の領土を有する世界なのである。従つて無限の領土を有する世界なのである。従つて諸計畫はこの世界の如く巨大なものである。

今日ロシアは八十年前のアメリカと同一の過程を辿つてゐる。改造の神話は、巨大でわけが判らず、感憤で滿されてはゐるが、本能の如く抗し得ない。盲目で而も原始的な力が法律の下にロシアを踏み潰してゐる。この神話は、巨大な歩どり、血なまぐさいチエツカ、更に秘密的で有害なゲ・ベ・ウの肉體を通つてゐるのだ。今や何處に舊い夢があるか、また何處に一九一七年の革命家の率直な計畫があるか？さてこれはかのマルクスやレーニンの豫言的幻想であつたのか？それは階級の不平等なき社會、豫言された樂園であつたのか？大河は勢よく流れ、力強い生命が草原に溢れてゐる。工場、摩天樓、都市が出現してゐる。橋梁は離れ／＼になつた廣大な土地を結びつけ、新しい坑孔によつて石炭や埋藏されてゐる金屬を採掘されてゐる。

ヨーロッパ人たるファウストの不安なアジテーションがロシアを手に入れた。ロシアはもはや自分として技術上及び商業上のレコードを作らうと考へてゐない。然らばロシアは國家資本主義でも、なほやはり資本主義であり、もしプロレタリアートが壓迫の武器を手に入れ、人間を否定する擧に出るなら、同時に『ブルジョアの封建制度』に罪を擬す權利を失うものであることを忘れたのか？何れにせよ、それはつまらない慰安にすぎない。ゲ・ベ・ウは遠く離れて居り、單に遠くから追ひ求めるべきであり、跛の足で、行き過ぎた形である。そのプログラムはもはや昨日のものであり、非常に永い間ロシアの歐亞雜種的進化に協力するやう呼び出されさうに見えない。

アメリカ、ロシア！ロシアにおいて雇はれてゐる外國技師の多數がアメリカ人であることは實に偶然ではない。ロシアは過去のアメリカであり、他の意味において未來のアメリカである。アメリカ人はその祖先が新しい世界の處女林を開拓した如く、草原を建設してゐる。共通の何ものか、あそこで改造のために一緒に働いてゐる此等の人々も結びつけてゐる。

昭和十年五月二十日印刷
昭和十年五月廿五日發行

ゲ・ペ・ウ秘史
定價金壹圓貳拾錢

版權
所有

發行人 豊島 擴
印刷人 小酒 井吉 藏
印刷所 東京市牛込區神樂町一ノ二
研究社印刷所

發行所

東京市麴町區内幸町一丁目三番地
大阪ビル五五六一七號室
日本外事協會
電話銀座(57)五四六一番
振替東京一九五五番

日本外事協定期刊行書目

高級外交評論雜誌 (定價一部五十錢 送料三錢)
一年六圓 送料不要

月刊 國際評論

現下の變轉紛糾せる國際政治、經濟情勢の動向を刺すところなく解説評論し、併せて最も正確なる資料を網羅蒐集す

英文評論雜誌 (定價一部一圓五十錢)
一年五圓 送料不要

季刊 CONTEMPORARY JAPAN

創刊以來四年にして世界評論界に嶄然頭角を抜く

英文日本年鑑 (四六大判千三百六十頁) (送料四十錢)
クローリス特上製 定價十圓

年刊 JAPAN YEAR BOOK

獨特の編輯により日本の全貌を最も效果的に紹介せる年鑑の最高峯

日本外事協會 東京市麹町區幸町大坂ルビ 振替東京一五九五番

日本外事協會刊書目

岡野 一朗 編 (三版)
滿洲地名辭典
 滿洲國及び關東州全部に互る、大都市、邑、鎮は勿論、著名なる部落、山川湖沼等、二千五百有餘を網羅し、まさに滿蒙の地文人文は壓縮して本書の一卷に載せる地名辭典である。
 定 價 三 五 〇 頁 クロス上製
 價 貳 圓 (送料八錢)

日本外事協會 編 (三版)
世界經濟會議
 世界經濟會議は、果して何ものをも齎らさなかつたらうか？ この會議の真相と意義とを解明せる本書は、世界經濟に關心を持つ者の絕對に看過し得ざるところである。
 定 價 一 圓 五 十 錢 (送料十二錢)
 四 六 判 三 七 〇 頁 布 裝 上 製

日本外事協會 編 (三千部限定版)
支那に於ける共產運動
 支那の赤化は何う進展するか？ 赤色支那の形相に就いて、最も正確なる資料によつて、その歴史的發展と現状とを解剖せる本邦唯一の公刊書である。
 定 價 一 圓 七 十 錢 (送料十二錢)
 四 六 判 四 〇 〇 頁 線 布 上 製

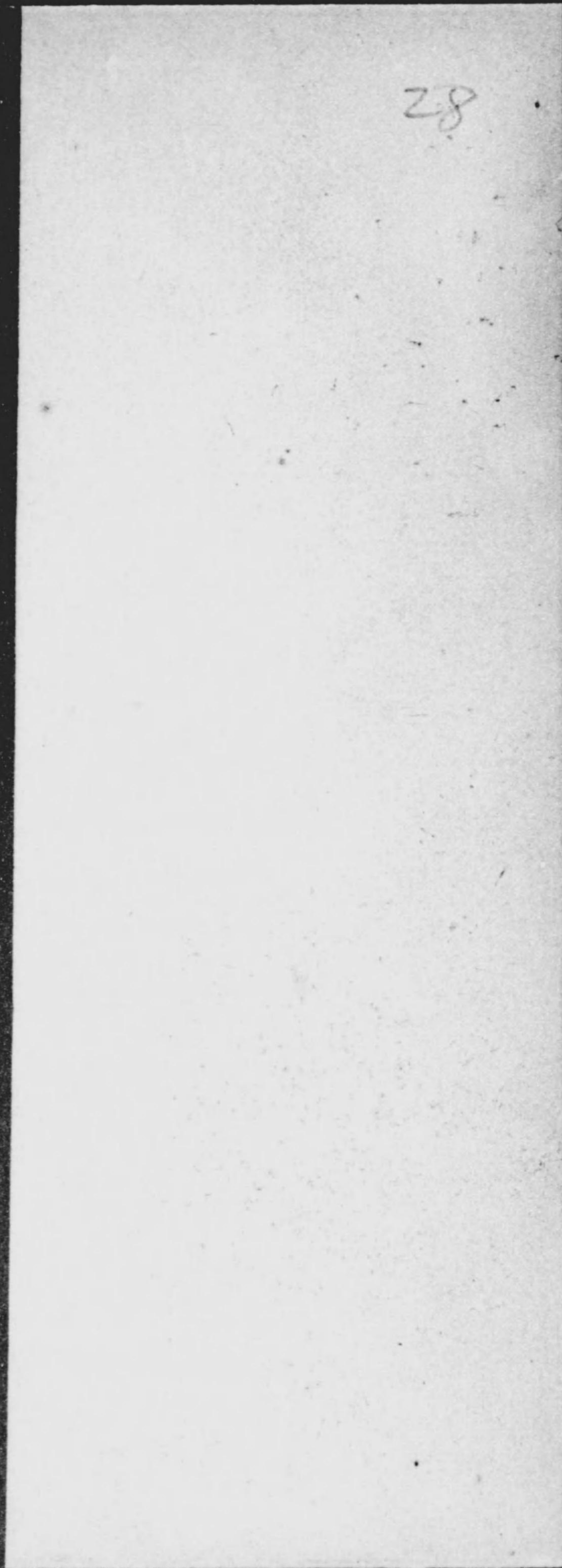
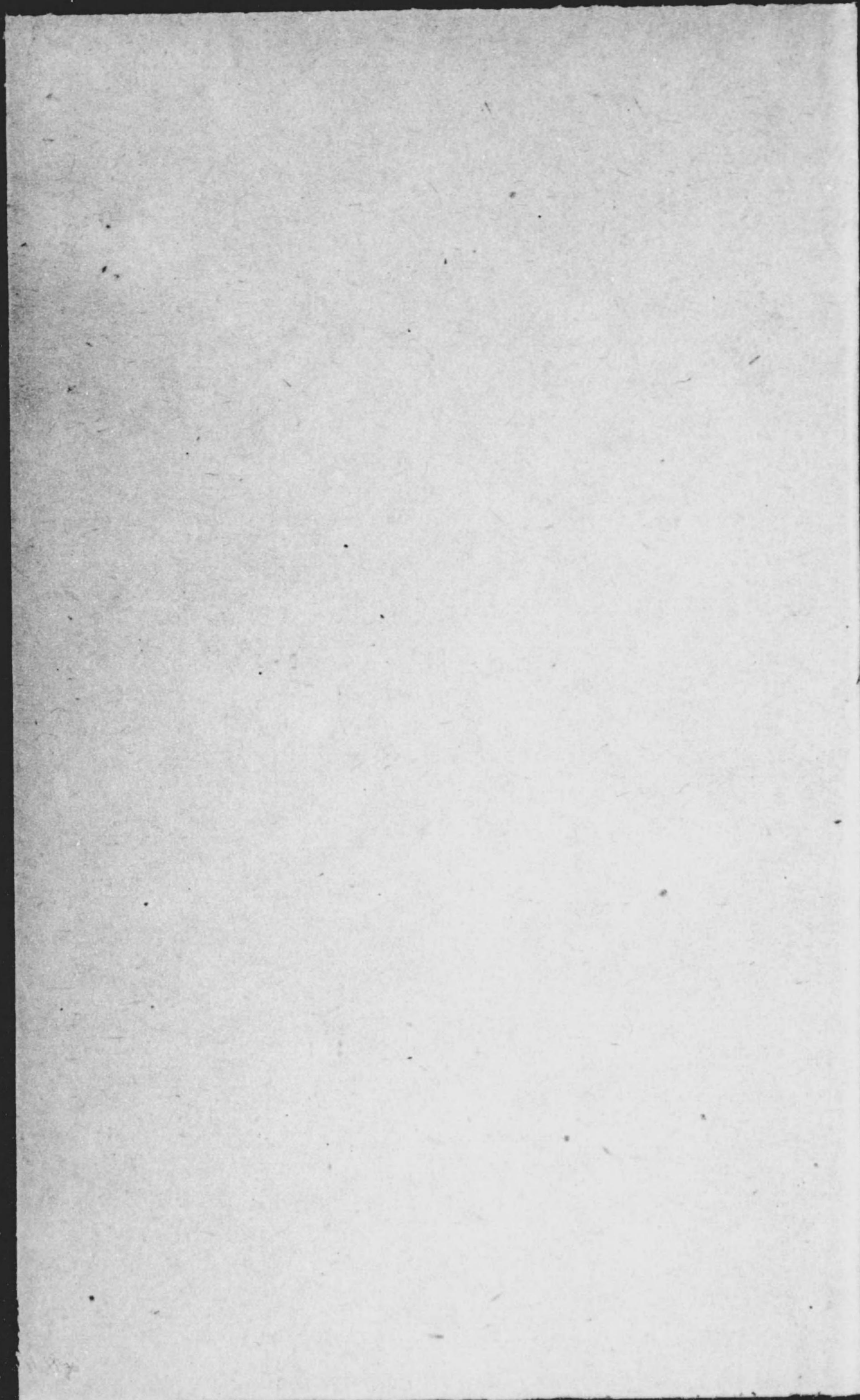
田中 鐵三郎 述 (再版)
恐慌渦中の國際經濟
 暗雲低迷せる世界經濟の全情勢に對し、日本銀行の田中局長が、該博なる智識と透徹せる識見とを以て、その禍因と現状と、その將來の姿とを、明快に解説論斷せるもの。
 定 價 一 圓 三 十 錢 (送料八錢)
 四 六 判 一 八 八 頁 紗 布 裝

シユベン グラー 著 (邦文版)
世界は何處へ行く
 西洋文明の没落を説ける著者が、東洋の、而して特に日本の、恐るべき勃興を力説して世界の行衛を指す。
 定 價 一 圓 (送料八錢)
 四 六 判 二 〇 六 頁 紙 裝 上 製

クレツ シイ 著 (邦文版)
支那滿洲風土記
 上海大學地理學教授たりし著者が十年の星霜を費して、全支三萬哩に互る實地踏査の結果に成れる雄骨碎心の著書である。二十數葉の寫眞、挿畫は暢達な譯文と共に精彩を増す。
 定 價 二 圓 五 十 錢 (送料八錢)
 四 六 版 四 二 六 頁 羽 二 重 裝

日本外事協會

東京麹町區幸町大坂ル
 振替東京一五九番



679
52

